

特別講演

主催 国際医療センター 病理診断科

後援 医学教育センター 卒後教育委員会

平成23年12月26日 於 国際医療センター C棟2階 会議室

グリオーマの病理診断—その要点と最近の話題—

中里 洋一

(群馬大学大学院 医学系研究科 病態病理学分野)

今回の講演会の演題は「グリオーマの病理診断—その要点と最近の話題—」であり、約40名の聴講者が参加して開催された。演者は3つの内容について講演した。すなわち、(1)グリオーマの病理診断における課題、(2)オリゴデンドログリオーマの神経細胞性分化、(3)脳室上衣芽腫について、である。

第一のテーマについては、グリオーマを診断する際に病理医が判定に迷いやすいポイントについて解りやすい解説が行われた。例えば、グリオーマかグリオシスかの鑑別の仕方、グリオーマのマージンの判定、毛突起性星細胞腫とびまん性星細胞腫の鑑別診断、星細胞腫・乏突起膠腫・上衣腫におけるGrade IIとGrade IIIの鑑別方法、膠芽腫の亜型分類などについて、実例を挙げながら説明が行われた。特に、低異型度グリオーマの遺伝子異常として最近注目されているイソクエン酸脱水素酵素について、詳細な解説が行われ、この遺伝子異常蛋白に対する抗体がグリオーマの診断にきわめて有用なツールとして用いられていることが明らかにされた。グリオーマのGrade IIとGrade IIIの鑑別は、患者の治療方針の決定に重要な事項であり、ここで紹介されたより客観的な診断基準は有益なものと思われた。

第二のテーマでは、乏突起膠腫の組織由来に関する

未解決の問題に対して、症例からのアプローチが示された。すなわち退形成性乏突起膠腫の一部に認められた神経細胞系分化を示す領域について、様々な方法論を用いた解析が紹介され、神経細胞系分化を示す大型細胞でも、乏突起膠腫と同じ遺伝子異常をもち、変異型IDH1蛋白を発現していることが示された。これらの事実から乏突起膠腫の発生母細胞が、グリア細胞と神経細胞との両方向に分化しうる前駆細胞である可能性が指摘された。

第三のテーマでは、上衣芽腫をめぐる最近の話題を取り上げられ、染色体19q13.42の遺伝子増幅との関連が解説された。上衣芽腫はきわめて稀な胎児性脳腫瘍であるが、あまりにも稀な腫瘍であるがゆえ、その存在を疑う研究報告もあった。演者の研究室では上衣芽腫とその関連腫瘍であるETANTRについて、病理組織学的ならびに分子遺伝学的検索を行い、これらが共通して19q13.42の遺伝子増幅を示すことを証明した。これらの研究成果は「多層性ロゼットを伴う胎児性腫瘍ETMR」なる新しい腫瘍概念の基礎となっていることが解説された。

講演終了後、本日のテーマと講演内容を巡って聴衆と演者間で活発な質疑応答が行われた。

(文責 佐々木惇)